

オランダと「聖杯騎士伝説」 ——その独立と「欧州新教連合東インド会社」としての VOC 創設から 欧州連合 EU へ至る人文地理学的考察——

Kingdom of the Netherlands and Legend of Holy Grail's Knight From the independence and foundation of VOC as “East India Company of EU for Protestant” to European Union using Human-Geographic Approach

川西 孝男 (京都大学・人文科学研究所)

Dr. KAWANISHI Takao (Institute for Research in Humanities, Kyoto University)

キーワード: 「欧州新教連合東インド会社」, VOC, EU, オラニエ・ナッサウ家, 聖杯騎士伝説

Keywords: “East India Company of EU for Protestant”, Huis Oranje-Nassau, Legend of Holy Grail's Knight

1 はじめに

17世紀前半に独立を果たしたオランダそしてその象徴とされた“オランダ東インド会社”として知られる「連合東インド会社」(Verenigde Oostindische Compagnie, VOC: 1602 - 1799) は、国策としてのグローバルな交易活動がその研究の中心とされてきた。一方で、西、英、仏などの欧州の軍事大国に挟まれ、これらの10分の1に満たない領土のオランダそして当地を拠点にするVOCを、その独立そして会社創設から数世紀にわたり支え続けた“見えない”隣国について言及したものは少ない。

私はそれを、当時中央集権化を放棄して領邦独立国家の共存を目指し、オランダと同規模あるいはそれ以下の、世界地図上に見えないほどになった神聖ローマ帝国のドイツ領邦であったと見ている。そこにはドイツ宗教改革を支持し、「新たな信念」の下での海外進出を目指そうとするオランダ諸州への期待のみならず、それ以前の歴史文化的な繋がりがあった。これがヨーロッパにおける聖杯騎士伝説であり、一本の河川(ライン川)から海洋世界に結ばれ、その関係はVOCの終焉後も今日の欧州連合EUでの交易さらには多国家共存の理念を現実化する経済協力活動などの先駆として受け継がれたことを人文地理学のアプローチから例証し、VOCの実態が後のEUの精神にも通じる「欧州新教連合東インド会社」であったという新視点を提唱する。さらにVOCも大航海時代の先駆者となったポルトガルにおける「聖杯」そして「聖杯騎士」の理想郷を追い求め、各地で交易競争や軍事介入を続けながら「東インド最果ての地」である日本に訪れたことに及びたい。

2 ネーデルラントと聖杯騎士伝説

オランダの地は元来、現在のベルギー領などと共にネーデルラントと呼ばれ、神聖ローマ帝国領内の有力諸州(領邦)であった。このネーデルラントには十字軍遠征帰還者によってエルサレムからキリストの聖血がもたらされたブ

ルージュそして、13世紀初頭に帝国のヴォルフラム・フォン・エッセンバッハ Wolfram von Eschenbach の聖杯騎士物語「パルツイヴァール Parzival」に記された聖杯騎士ローエングリン Loherangrin の登場する欧州屈指の海上交易都市として栄えたアントウェルペンなどが所在する。

さらに、ネーデルラントから帝国領内及びスイスに至るライン川と共にオーストリア・ハンガリーなどに通じるマイン・ドナウなどの長距離河川が有史以来様々な交易・人的移動の役割を果たしていた。特にライン川は大型輸送船の往来が可能であり、ネーデルラントの港からの海外輸出品が河川を通じて、帝国の東部辺境に至る地にまでもたらされ、周辺都市は国際性を兼ね備えた領邦文化が栄えた。このライン川には上述の聖杯騎士伝説のほか、オランダ・ドイツ国境にゲルマンの英雄ジークフリートの生地クサンテン Xanten がある上、海外貿易での富を享受したかのような「ラインの黄金」伝説が流布されるなど、河川で繋がれた欧州中央部は文化的紐帯で結ばれていた。

3 オランダ独立期における VOC の創設

16世紀後半にネーデルラントはスペインの軍事侵攻を受け、上述のアントウェルペンが陥落(1585年)したため、当地の貿易・船舶業者の多くがアムステルダムに拠点を移し、独立運動を遂行する中でVOCを創設した。当時VOCへの莫大な資本調達、遠距離航海可能な造船技術や海路の確保、船員や兵士などの徴用そして何よりも独立で混乱する本土防衛を80年に及んだ独立戦争(1568-1648)の中、一国のみの力で成し得ないことは明らかである。このオランダの命運はライン沿岸の神聖ローマ帝国領邦の有力貴族であったオラニエ・ナッサウ侯ウィレム“沈黙侯”Willem, The Silent (prins van Oranje, graaf van Nassau -Dillenburg, 1533-84)によって開かれ、総督となって独立戦争を指揮し、河川周辺諸侯がこれを支援した。彼の登場は上述のアントウェルペンの救援に現れたローエングリン

をも想起させるほか、同じく聖杯騎士で後の聖杯王バルツィヴァールにおける「沈黙」の場面の重要性からも、ウィレム侯がこれらの伝説を深く知り得ていたことが伺える。

さらに、このウィレムの相続したフランスのオラニエの地もヴォルフラムの著作「ヴィレハルム Willehalm」において主人公の故郷として登場する。「バルツィヴァール」に続いて執筆され、13世紀初頭の十字軍における異教徒との交戦の中で互いの宗教を認め合う寛容がテーマとなっており、オラニエに伝わる自身の名に似た英雄を重ね合わせて独立戦争に挑んだことが十分に考えられる。これは当時、彼の生家ナッサウ・ディレンブルク家のゲオルク伯 Graf Georg von Nassau-Dillenburg 1562- 1623 が、ヴォルフラムの出身地とされるドイツ中央部フランケン地方のアンスバッハ Ansbach、そして聖杯騎士伝説に関係の深いパイロイト Bayreuth の両地を治める辺境伯の元へ出仕していたことに繋がる。これらウィレム侯へのヴォルフラムの影響はオランダ独立や VOC の海外進出そして「バルツィヴァール」や「ヴィレハルム」の主題でもあった「宗教的寛容」に通じる。また同侯は、新教そしてオランダ独立の橋頭保とすべくライデン大学を創設した。ウィレムと共に独立戦争を戦い、VOC 創設を主導したオルデンバルネフェルト Oldenbarnevelt, Johan van. 1547-1619 もライン川沿いの新教勢力の拠点ハイデルベルク大学などに学び、独立後のオランダを主導する人材の育成に努めた。

これらは VOC の意味する「連合」を冠した社名に顕著に現れている。この連合とは通常、オランダ海運会社の連合を意味するとされるが、上述の内外情勢をみると、VOC としてオランダの行く末は、欧州の新教支持国家による長期にわたる独立支援、あるいは隣国の神聖ローマ帝国領邦との「連合」戦略すなわち相互安全保障なくしてあり得なかったと言える。これは1648年のウェストファリア条約によって神聖ローマ帝国の領邦そしてスイスなどと共に、オランダが公式に独立を果たしたことで明かである。

4 「欧州新教連合東インド会社」としての VOC

このように VOC はライン川によって結ばれた神聖ローマ帝国領邦との連携の下、「欧州新教連合東インド会社」そして「初現にして完成形」と言われるグローバル企業の原型として、先駆者のポルトガルと各地で競争・交戦し、販路を獲得していった。ここにも「バルツィヴァール」に記された、聖杯城での祝宴に現れた「聖杯がもたらす」東インド産の香辛料で味付けされた食材や、黄金などの莫大な富が現実となった。そしてポルトガルと同じく、その最終目的地たる聖杯騎士伝説の地とみなされる要素を持つ黄金島「ジパング」に辿り着く。開府まもない家康も、新興国オランダに江戸周辺の未開湿地帯を開拓する自らの姿を重

ね、西洋の「新教徒」すなわち「新たな信念を持つオランダ人」たちに期待を寄せた。彼らも日本人に共通点や共感を見出し、VOC 末期までの約2世紀にわたり交易を続けた。VOC はこのジパングで莫大な金銀を得るなど、彼らの聖杯の探索は成功したと言い得る。さらに日本や中国における聖杯とも言うべき〈高級〉陶磁器に注目し、本国そしてライン川経由で上述のパイロイトなどの領邦宮廷にもたらし、アジアブームの先鞭をつけた。布教を控えて交易活動を重視した VOC は逆に、その人となり（人間性）や商品を通じて現地の人々の信頼を得るなど、今日のグローバル社会の共存の在り方をも示したのではなかろうか。

一方、ドナウへ、マイン～ラインといった逆ルートで中東の医学・科学などが欧州そして、蘭学として日本へもたらされたが、神聖ローマ領邦のドイツ人の貢献も大きく、これが維新後のドイツ帝国との外交、西洋医学・科学技術導入に繋がっていったことは周知のとおりである。

5 結語 VOC の終焉と今日の日蘭関係そして EU

現在のオランダそして既に解散して2世紀が経過する VOC をグローバルな歴史観（グローバル・ヒストリー）から捉えて結語としたい。VOC と同時期に誕生した江戸幕藩体制も VOC の終焉とともに幕末を迎え始めた。VOC としてオランダを支援した神聖ローマ帝国もフランス革命の余波を受け、VOC 解散後10年を経ずに千年王国の終焉を迎えている。オランダも斜陽期に入ったが、経済的繁栄の黄金期ではなく独立の苦難の時代を忘れることはなかった。今日においてもオラニエ・ナッサウ侯が国家元首を務め、オランダの将来そして日本との400年にわたる外交を見守っている。独立運動期に作られた世界最古とされる国歌の冒頭では、オランダのために立ち上がった、“聖杯騎士” ナッサウ侯ウィレムの名が今も歌い継がれている。

一方、VOC 時代の国内外に及ぶ多くの人的物的遺産を継承したオランダは、EU の先駆的存在の一として EU 圏最大の貿易港ロッテルダムを中心に圏内外への交易を主導している。これらは VOC 時代に築かれた「宗教的寛容と超国家的（国家連合的）交易」の成功が、2度の世界大戦を経て、なお今日の EU に受け継がれている証左でもある。この聖杯騎士伝説との縁の深いネーデルラントのブラッセルには EU 本部が置かれ、上述の VOC の精神とともに今も欧州そしてグローバル交易の舵取りを担っている。

以上

※本論は東京大学史料編纂所における特定共同研究「モンスーン文書・イエズス会日本書翰・VOC 文書・EIC 文書の分野横断的研究」（モンスーン・プロジェクト、松方冬子班）の研究成果を取り入れている。

※本論では1648年の独立後をオランダとし、それ以前をネーデルラント（ベルギー領等を含む）と表記した。

（本論補足資料は WEB リポジトリ上で公開）